

九条の樹

東久留米「九条の会」ニュース 第20号
2009年3月発行・東久留米「九条の会」
代表者 古田足日・連絡先 鈴木TEL 042-473-9489
<http://members2.jcom.home.ne.jp/hgsk9jk/>

危険なソマリア 沖派兵への動き

ソマリア沖の海賊って？

08年、全世界では293件の海賊事件があり、そのうち東アフリカのソマリア沖で111件(38%)と急激に増えています。世界全体では、00年の469件から06年には239件と半減してきていたのですが、ソマリア沖での海賊で年々増加しています。

この地域は、欧州や中東のアジアを結ぶ海上交通の要衝。毎日50隻の通行があり、その船舶への海賊行為が問題となつていきます。

なぜ、海賊が増えたのか？

ソマリアは、60年にイタリヤから独立しました。その後、軍部や武装組織などの内戦、米軍やエチオピアなどの介入もあって混乱状態が続き、中央政府の不在の内戦状態がいま

も続いています。米誌の『ニューズ・ウィーク』は、「米国の対テロ戦争がソマリアの政変を招き、それが海賊を横行させた」と指摘しています。

ソマリアの国の混乱が、貧困や対立を生じさせ、元漁民や武装勢力などが身代金目当ての海賊を生みだしたとみられています。

対策はどうすればいいの？

海賊は、私有の船、航空機を使って、公海上の船舶、航空機に対しての暴力、略奪行為のことをいい、「すべての国が管轄権を行使できる犯罪行為」です。

犯罪行為を取り締るのであれば、警察力で対応するのが原則です。

アジア地域では、マラッカ海峡で海賊事件が多発し、その対策のため日本政府が「海賊対策国際会議」を呼びかけ、14カ国で「アジア海賊対策地域協力協定」を結び、その取組みが効果をあげ、8年間で54件(約20%)

に減りました。この対策の中心になったのが、海上保安庁の警備能力強化策でした。

ソマリア沖でも周辺国を中心に「ソマリア周辺海賊対策地域会合」で行動指針を採択し、地域協力での警備能力強化を中心に取組が始まりました。

ソマリア対岸のイエメン警備隊作戦局長は「海上自衛隊派兵に高い効果は期待できず、必要ない。むしろ、我々の警備活動強化に支援してほしい」とのべています。

どうして自衛隊がいくの？

一月に発足した自公両党による「海賊対策等に関するプロジェクト・チーム」では、「海賊対策」としながら、主な議論は自衛隊の派兵問題でした。「インド洋での給油法をどう扱うか。イラク(撤退)後の自衛隊海外派遣の在り方をどうするかで、いろいろ検討した」と政府高官は語り、自衛隊の新たな派兵先を探すというなかで、海賊対策が浮上してきたのです。自

衛隊法による派兵だけでなく、新法による「武器使用の大幅緩和」も検討、提案されようとしています。

「憲法改定」をめざしている改憲勢力にとっては、好都合の

案件となり、数多くの自衛隊派兵を繰り返すなかで、究極の解釈改憲の「海外派兵恒久法」を導入し、そしてその先に「九条改憲」の狙いをもっているのです。

「地域九条の会」の取り組み

南部九条の会

「今間く四方和夫さんの八十八年」

1月12日、20人の参加をえて開かれました。

四方和夫さんは、当会の世話人で、1920年生まれ、現在88歳、いまでも海外との貿易をされています。

学生時代、軍部の台頭で急激に世の中が変わったこと、戦後の社会主義国との貿易では、現在のようにカネ至上主義ではなく、お互いの立場を尊重することができたことなど、興味のつきない貴重な話を聞くことができました。

西部九条の会

「語りあおう 今と憲法」

—1月17日(土)—

30数人参加。「平和のつくりかた」の第2回目。オープニングとしてDVD「ジャーハダ・イラク民衆の闘い」(制作・イラクの子どもを救う会)から「民営化される戦争」の映像資料を上映。「戦争のつくりかた」(マガジンハウス刊)3〜4ページについて、文章に関連したテーマ、戦争のしくみとプロセス、満州事変から中国戦争、平和憲法の制定過程について、リポーターの報告のあと、参加者で話し合いました。

第3回は、3月21日、改憲への主な動向、自衛隊と日米同盟などについて考えます。

前沢・南町9条の会

第3回「平和と人権」学習会

—2月8日(日)—

2008年5月に国連で「障害者の権利保障」が採択された。実際は日本国憲法で守られているとして、全国で障害者自立支援法に関わる訴訟を起こしている。

4月初旬の第4回学習会で日本国憲法の最後の「議会」を読む。

本町・中央町九条の会

2ヶ月毎に世話人会で学習会をおこなっています。第2回は13人参加。「憲法9条の誕生」ビデオを上映しました。

キリスト者9条の会
「毎月学習会3月2日」

憲法と旧約聖書の戦争の記述の所を引き出し学習。

次回は4月6日の予定。



2月の「9」の日宣伝

2月9日4時〜5時、東久留米駅西口でニュース「9条の樹」配布。この日は7人の参加があり、250枚配布しました。

毎月9日は「9」の日宣伝

ごいっしょに参加しませんか！
午後4時〜5時・東久留米駅西口で「憲法九条」を「守り」「広げる」宣伝をしています。

私の戦時下

久保田 幸子 No.1

(下里在住)

空襲の夜

3月10日の東京下町の空襲の後、突然強制疎開を命じられ、港区の家を追われて移り住んだ大久保の町で、4月と5月の山の手の空襲で家を焼かれ、すべてを失いました。

当時私は今の高校2年生で、3月の空襲に次いで死者の多かった5月27日の空襲にあった時は、母と弟と叔父達の5人暮らして、焼け跡の中に残った戸山ヶ原に程近い今の新大久保のコーリヤン街にも近い所です。当時は3月の空襲の教訓もあって壕には入らず、隣組の人達と寄添うように交差する探照燈と次々に遠近に広がる火の色を眺めていました。

一機のB29が火に包まれバラ

バラに落下するのを見た時、その報復とばかりに大量の焼夷弾が頭上にばらまかれました。焼夷弾は夜の場合は爆弾と違って落下するのが赤い火の点となって迫ってくるのがすべて見え、一定の位置で一発は35発程に分解し、空を覆う火の玉は目の届く限り空いっぱいに広がりました。それは気が狂う寸前に身をふるわせて美しいと叫ぶ程のやさしい美しさでした。立っていた人達は四散し私は一瞬の判断で風上を求めて細い道を走り出しました。両側の家は次々火をふき宙を飛んでいるような気持で、走る後にすぐ落下するといふ中で、突然前を走っていた赤ちゃんを背負っていた人が直撃をうけ横に飛ばされるように倒れましたが、私は足を止めることもなく焼け跡の素掘りの壕に飛込み、周囲に突刺さる焼夷弾を呆然と見ていました。

長い夜が明け、オレンジ色をした大きな太陽が煙のただよの中に昇った時は、井戸端に集まった人達は互いに「オー」と言っただけで喜びを表すことも忘れていました。私はあの時赤ちゃんを背負った人に対して一切の心遣いをしてはいず、生きる方向に走るだけの一匹の鬼でした。あの場に一人残された時、母も弟も探さずに走り出してもいました。

戦争は私の心の中の鬼の姿を引き出したのかも知れません。誰にも死ぬまで消えないようなこんな経験を再びして欲しくはありません。



久保田 幸子

No.2

力をつくして
立ちふさがること

敗戦の時私は今の高校2年生で、海軍の若い士官と接する機会も多かった環境もあって自他に認める程の軍国少女で、八紘一宇のスローガンを心から信

じる子でした。

8月15日の天皇の放送は、その戦いの中心にあった人から「時に利あらず」と言う意味の言葉が発せられるのを聞いた時、私の中にやり場のない怒りが広がりました。民族の興亡をかけて理想のために戦ったのなら勝負に関係なく最後まで全うするべきで、沖繩や特攻攻撃は何の為だったのか、不利ならやめるといふ程の戦いをしていたのかというのが、その時の私の想いで、直後に小麦粉等の配分が始まり(海軍関係の職場なのに)、その変わり身の早さに呆然とするばかりでした。

戦後、母の死後一人となった私は家というものを失って、他人の中では一人で考えるという時間を一切持たず、当時の私の前に表れたのは上野の町の半長靴に短刀を秘めた若者であり、たくましいかつぎ屋の仲間達、昭和電工疑獄に関係もあり、右翼とも継がりのある人だった。7人の雑居でも自

分の家が持てた時は4年が経過していました。

人が考えられるのはある程度自立出来る立場が保たれる生活が必要です。私が学友のように代用教員になるなど時代に順応することができなかつたのは、私はだまされたのではなく、自分で選んで進んであの時を生きたいという思いが消えず、その自分を恥じる気持ちが強かつたのです。私の近くには「生きて今を画け」と教えてくれたエスペランチストだった先生、私を大馬鹿ものといった東大生もいたのに、私はその言葉に心を波立たせながらも自分をみつめ直す目を持ちませんでした。学ぶということに何歳になつても貪欲でいようと思いました。

戦争からは何も生まれて来ません。自分の考えを確立できるだけの広い視野を持ち続けたい。戦争への道へは、よろよろとでも力をつくして立ちふさがること、これが戦争の中を生きた私への答えです。

《平和を考える本》

『縞模様のパジャマの少年』

ジョン・ボイン・作

千葉茂樹・訳

岩波書店・一八〇〇円＋税



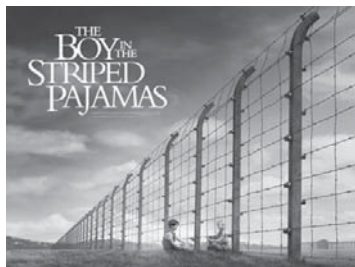
第二次大戦中、ブルーノ少年の父親は、ユダヤ人収容所の所長に命ぜられた。ヒットラー総統の忠実な部下である父親は、なんの疑問もなく、家族を連れて赴任。

そこでブルーノは、長くて巨大なフェンスの向こうに、縞模様のパジャマ姿の少年を見つけた。何も知らない無邪気なブルーノは、フェンス越しに少年と友情を培い、やがてフェンスの下から収容所にもぐりこむ。ちようどの日

は、ガス室で大量虐殺の行われる日に当たっていた……。

著者は、1971年、アイランド生れ。児童書として出版されたが、どんな状況下でも友情に込めようとする子どもたちの心情と、知らなかつた、ではすまされない「無知の罪」を重ねて描いて、戦争の本質に迫る作品となっている。

訳者の千葉にはまた、『国境を越えて 戦禍を生きのびたユダヤ人家族の物語』(W・カプラン&シェリー・タナカ/B.L出版)の訳書もあり、おすすめの一冊である。



欧州とアメリカではすでに映画が公開されています

お知らせ

◆「西部九条の会」

連続講座「語りあおう 今と憲法」

2009年3月21日(土)

西部地域センター3階

講習室2・3

午後2時～4時半

参加費・無料(資料代100円)

改憲への主な動向・自衛隊と日米同盟・海外派兵恒久法について話しあいます。

◆前沢・南町九条の会

「憲法を読む会」第4回

2009年4月予定

日本国憲法の最後の「議会」を読む。

◆キリスト者9条の会

毎月学習会4月6日予定

喫茶アコルデ(東本町)にて

